

# 「こおりやまの米」通信

平成26年5月1日



郡山市  
イメージキャラクター  
「かくとくん」

編集：郡山市

J A郡山市 (Tel. 921-0517)

NOSAI 郡山田村 (Tel. 933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (Tel. 935-1310)

発行：郡山市農作物生産対策協議会 (郡山市農業振興課 Tel. 924-3761)

## Vol.3 「田植～本田初期管理」 次回は6月上旬

### 1 気象予報 東北地方 1か月予報 (4月19日から5月18日まで 平成26年4月17日発表)

＜予想される向こう1か月の天候＞ 天気は数日の周期で変わるでしょう。東北太平洋側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の気温は、低い確率が40%、平年並の確率が30%です。

### 2 田植え

- 低温時や強風時の移植は植え傷みが生じるので、移植は天気の良い日に行いましょう。
- 植え付け本数は1株当たり3～4本とし、苗が転ばない程度に浅く植えましょう。(「天のつぶ」は坪当たり70株植えを基本とします。)  
【深植えすると・・・】 下位分げつが発生しにくく、生育が遅れる。  
【植え付け本数が多いと・・・】 ①肥料切れが早くなる。 ②茎が細くなる。 ③酸素不足で根も細くなる。
- 移植から活着までの間に低温が予想される場合は、深水管理を行いましょう。
- 弁当肥の施用：活着が悪そうであれば、田植え2日前頃に1箱当たりチッソ成分1g程度を弁当肥として追肥すると活着が良くなります。  
【チッソ成分1g/箱の目安】  
水0.5リットルに稚苗用液肥源(15-19-15)を約6g溶かし散布します。高温時は散布をさけましょう。

### 3 いもち病対策 「地域全体で葉いもちの抑制に取り組みましょう!!」

#### (1) 箱施用剤の使用

◆◆◆特定の薬剤に耐性のあるいもち病菌が確認されています。同一系統の農薬の連用は避けましょう◆◆◆

特に、「MBI-D剤」は広範囲で耐性菌が確認されているので、同系統の薬剤は使わず、その他系統の薬剤とローテーションして使用してください(表参照)。 表：主ないもち病防除剤の種類

(例1) 箱施用剤で「デラウス剤」を使用した場合は、穂いもち防除の時に本田散布剤として「コラトップ粒剤5」を使用する。

(例2) 昨年、本田散布剤で「アチーブ粒剤7」を使用した場合、今年は「オリゼメート粒剤」を使用する。

#### (2) 置き苗の処分

葉いもちの発生源は、補植用の置き苗です。

補植作業を行う場合は5月末までには完了し、置き苗は水田内に放置しないようにしましょう。

補植は欠株が連続している所だけで十分です。補植が終わったら直ちに置き苗を処分しましょう。

		MBI-D 剤	その他の系統
農薬名	箱施用材	ウィン剤、デラウス剤	デジタルコラトップ剤、Dr.オリゼ剤、嵐剤
	本田散布剤	アチーブ粒剤7	オリゼメート粒剤、コラトップ粒剤5、フジワン粒8剤、イモチエース粒剤

補植用の苗箱にも、箱施用剤の散布を忘れずに!



### 4 雑草防除 「除草剤は遅れずに散布しましょう!」

#### (1) 初中期一発剤使用上の注意 (除草剤散布後7日間は落水しないようにしましょう!)

- 補植は除草剤の散布時までには終了させておいてください(除草剤の効果が低下する可能性があります)。
- 水口・水尻はしっかり止めて、決して除草剤が流失しないように注意しましょう。畦畔の漏水防止もあらかじめしておいてください。
- 散布時は十分な水深(5cm以上)にすると、土の表面に均一な処理層が形成されます。また、深水にすることで雑草が茎葉から農薬成分を吸収し、十分な除草効果が発揮されます。

#### (2) 万が一雑草が残ったら・・・ 残った雑草の種類によって除草剤を選択し、適期に追加防除しましょう。

ヒエだけが残った場合

⇒クリンチャー1キロ粒剤

(移植後7日～ノビエ4葉期まで：1.0kg/10a または移植後25日～ノビエ5葉期まで：1.5kg/10a散布)

ヒエ以外の雑草も残った場合

⇒ザーベックスDX1キロ粒剤(移植後20～30日(ノビエ3.5葉期まで))

【注意】※著しい葉害が発生する場合がありますので、30℃以上の高温が予想される場合は使用しない。

広葉雑草だけが残った場合

⇒バサグラン粒剤(ナトリウム塩)(移植後15～50日 但し収穫60日前まで)

「春の農作業事故防止運動展開中」(4/1～5/31)

- 農機用後部反射材などによる事故予防を。
- 農作業は無理せず「安全第一」で。～目指せ農作業事故ゼロ～



この資料は、平成26年4月1日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

※放射性物質の吸収抑制のため、配布の塩化カリ(20kg/10a)は必ず基肥で散布してください。  
※原発事故による放射性物質の影響を受けている「べたがけ資材やビニル類」、また汚れのひどい資材は、二次汚染の恐れがありますので水稻の育苗に使用しないでください。

## 水田の除染を実施された方へ

無償配布された塩化カリは、平成26年作の基肥で必ず散布してください。

除染実施時に散布したケイ酸カリは、原状回復（除染実施前の状態）が目的であり、放射性物質吸収抑制対策としては、十分ではありません。必ず、塩化カリを施用してください。

## 平成25年産米の全量全袋検査と土壌分析の結果について

1 放射性物質吸収抑制対策として配布したカリウム肥料の効果により、平成25年産米の全量全袋検査の結果、基準値（100Bq/kg）を超える放射性物質は検出されませんでした。

2 また、25Bq/kgを超える放射性セシウムを含む米の検出数も、平成24年産に比べて大幅に減少しました。

	総袋数	25Bq/kg以上検出袋数	検出割合（%）
平成24年産結果	1,424,399	1,377	0.097
平成25年産結果	1,460,064	170	0.012

（ふくしまの恵み安全対策協議会 HP より 平成26年4月22日現在）

3 郡山市では、25Bq/kg以上の放射性物質が検出された生産者を対象に聞き取り調査を行ったところ、約16%の生産者が稲わらや堆肥の還元を施用しておらず、置換性カリも施用した生産者の圃場より少ない傾向がありました。

	稲わらを施用した生産者	施用しなかった生産者	稲わらを施用せず、塩化カリの散布も不十分だった生産者
置換性カリ含有量の平均値 (mg/100g)	15.3	11.7	8.1

4 置換性カリが不足する圃場では放射性セシウムが吸収されやすくなりますので、平成26年度も引き続き、無償配布した塩化カリは必ず基肥で施用してください。

5 稲わらや堆肥を施用することで保肥力が向上し、土壌中のカリ含量が高まり、放射性物質の吸収抑制効果が高まると考えられますので、有機質を積極的に圃場に施用し、土づくりに努めましょう。

## 大豆・小豆の放射性セシウム吸収抑制対策について

大豆及び小豆も水稻と同様に、土壌中の置換性カリ含量が低いほど生産物の放射性セシウム濃度が高くなる傾向があります。

基準値を超える放射性セシウムを含まない大豆・小豆の生産のため、以下の点に注意してください。

**放射性セシウムの吸収を抑制するためには硫酸カリが有効です！**

10aあたり40kg（2袋）の硫酸カリを目安に施用してください。

土壌の放射性セシウム濃度が高い地域等では、10aあたり140kg（7袋）の硫酸カリを施用します。

**苦土石灰も併せて施用しましょう！**

カリ肥料の施用量が多いと、大豆のマグネシウム吸収を阻害する場合があります。また、硫酸カリを大量に施用するとpHが低下しますのでマグネシウムの補給と酸度調整のため、苦土石灰（10aあたり80kg（4袋）程度）を施用しましょう。

**硫酸カリ、苦土石灰は基肥時に施用してください。**

**耕うんはなるべく深く！**

土壌の放射性セシウムは表層に多く存在しています。放射性セシウムを土壌中の深い部分まで分散させるとともに作土層を拡大して大豆・小豆の根張りが良くなるよう、深耕等を行いましょ。

**大豆・小豆に土壌が付着しないようにしましょう！**

大豆や小豆に土壌が付着すると、生産物が汚染される可能性があります。倒伏を避けるとともに、収穫時には土が付着しないよう十分注意しましょう。